

いきいき山梨ねんりんピック2022

山梨県シルバー俳句大会 入選作品集



◆開催期間 令和4年6月17日（金）～6月19日（日）

◆会場 山梨県立図書館1階「イベントスペース」

主催 いきいき山梨ねんりんピック実行委員会
主管 社会福祉法人 山梨県社会福祉協議会

山田省吾選

■特選■

保育器の生命の拳春灯

北杜市 八代 菜美子 七四歳

照紅葉富士絶景のレストラン

中央市 佐野直美 六八歳

たらい舟降りて裸足の島娘

北杜市 伊藤政雄 八一歳

日溜りに父の散髪花八手

都留市 野中定代 七五歳

たうたうと堰の水嵩夏来る

韮崎市 白倉みはる 七二歳

■秀作■

立ちこぎのぶらんこ富士へ富士へ漕ぐ

富士吉田市 加々美恵子 六八歳

鶏鳴に令和四年の春迎う

甲府市 嶋田英子 八一歳

ほのぼのと大地の息吹春動く

都留市 直井信朝 八〇歳

古民家や雛の前の正座の子

南アルプス市 小松和美 八三歳

豊穰をもたらす富士の春の雪

富士吉田市 小俣紀子 八一歳

湯治場の赤き番傘花の雨

富士河口湖町 堀内ミツエ 七五歳

山滴る登りゆく子の白き靴

山梨市 埜村和美 七〇歳

機を織る夜業の母によもぎ餅

富士吉田市 渡辺喜作 八一歳

洋上の仕掛け花火や波静か

甲府市 功刀佳秋 六七歳

風光る障子に揺るる松の陰

上野原市 安留保子 八六歳

【評】

投句数は七八八句で昨年より一二四句減少しました。投句者には経験の差を痛感しました。選句上二番気になったのは、最重要の季語の無い句が多々あったのは残念でした。次に、表記上の事ですが、漢字、平仮名、片仮名の使い分けが気になりました。無闇に片仮名の使用が目につきました。略字、誤字、川柳風の句もありました。

(特選句)

○一句目 未熟児で生まれた生後間もない子は、保育器で育てられている。外からじつと見詰めているのは、母親と祖母か。灯る明かりに、子はしっかりと拳を握っている。健やかな成長を期待する。「生命の拳」が効果的。

○二句目 富士山に真向う景勝地のレストラン。楓の葉の紅葉は最高潮に達し、照り輝いている。すでに雪の来ている富士山の全景がくつきりと見える。近景の紅葉と遠景の富士山を詠む。

○三句目 佐渡島を想像した。多少の漁でもしていたのか。沖からたらい舟が戻って来た。女性は、舟から降りると、裸足のまま砂浜を駆けて行った。健康で活発な娘さんが目に浮かぶ。

○四句目 庭の片隅にはハツ手の花が咲いている。天気は良く庭の日溜りに椅子を出して、父親の散髪をしているのは娘さんか。暖かな日の中で、親子で語りいながら楽しんで思えた。

○五句目 夏の季節が到来した。農家では、田の代掻きをして、田植で忙しくなる。水を引く堰の土砂を浚って水の流れをよくする。流れは勢いよく、弾心水音に夏を実感する。

井上康明選

■特選■

うららかや一笑百寿の処世訓

甲府市 三枝悦夫 八七歳

紫陽花や寺に千体水子仏

都留市 小笠原 勇 九〇歳

夫の着し防寒着なり我が着る

笛吹市 日向敬子 八五歳

犬もまた連峰の雪遠望す

甲府市 小林正樹 八二歳

杉の花ゆさゆさ湧水の溢れ

北杜市 水上英子 七〇歳

■秀作■

散髪屋つるべ落しの中にあり

山中湖村 坂本信世 七二歳

玄関に大きな靴や卒業す

笛吹市 萩原照子 九五歳

大海へ続く明るさ野水仙

都留市 渡辺君代 七七歳

渡さるる赤子の笑顔山笑ふ

笛吹市 鈴木ふみよ 八七歳

弟の作る新米手を合わす

富士吉田市 宮下 はる江 九五歳

一瀑の氷柱ゆるみて光落つ

笛吹市 石倉正明 七一歳

富士の灯の煌めきてをり梅を干す

富士吉田市 田辺和代 八〇歳

励ましの便りのありて寒明けける

上野原市 岡部 襄 九九歳

歩むことままならぬ身や寒椿

富士吉田市 片桐充子 八七歳

なつかしい母の指先紙の雛

大月市 真道朱實 七八歳

【評】

人生の年輪の變を思わせる味わい深い作品が揃いました。春夏秋冬の季節の情景がまんべんなく詠まれ、季語が滲る深い季節感と詠もうとする人生の一場面が分かち難く結びついています。巧みな表現技巧を生かした味わい深い作品にも永年俳句を作りつづけてきた歳月を思いました。

(特選句)

○一句目 笑えば笑うほど長生きが出来るという処世訓が明るく春の日差しを称えているよつです。うららかという季語が人生百年の時代を語っています。

○二句目 梅雨季の寺に紫陽花が咲いています。青から濃い青へと咲きつづく紫陽花の傍らに千体の水子仏が並んでいます。鮮やかな紫陽花の花が水子の魂を悼むよつです。

○三句目 夫は既に亡くなっているのでしょうか。夫がいつも防寒着としていた衣服を作者は改めて着てそのぬくもりをたしかめています。綿入れの半纏を思いました。

○四句目 作者に長年飼われ従ってきた愛犬でしょう。雪晴れの日、作者とともに散歩に出て遠くの雪嶺を並んで眺めています。作者も愛犬も健やかな雪晴れの日。

○五句目 作者は花粉症かもしれません。杉山の杉の花は黄色い帯となって風に流れます。雪解けの水が堰に溢れる春の屋下がり。豊かな春日のひとつときを描いています。

保坂敏子選

■特選■

揚雲雀ひたすら青空に親し

富士川町 有泉 よ志枝 八三歳

黎明のいのち透きゆく寒牡丹

甲府市 小菅 光子 八四歳

黒松の幹の百年日脚伸ぶ

中央市 佐々木 いづみ 八二歳

裏口へ廻りても留守返り花

昭和町 齊藤 猛美 七五歳

振り返り金木犀の木を探す

笛吹市 高野 博夫 七三歳

■秀作■

小春日の会釈が永久の別れとは

上野原市 佐藤 櫻子 八一歳

雪明り母を看取りて朝を待つ

甲府市 星 はるみ 六二歳

生きるとは動くことなり露の臺

葑崎市 立川 和男 七三歳

冬銀河名のある星も無き星も

葑崎市 樋口 芙美子 七七歳

大寒やひび割れそうな空のあお

中央市 長田 春江 八六歳

満開といふ淋しさの冬桜

笛吹市 渡辺 伊都子 八七歳

たうたうと堰の水嵩夏来る

葑崎市 白倉 みはる 七二歳

霊柩車来てゐる梅の二、三輪

北杜市 勝川 信子 八三歳

杉の花ゆさゆさ湧水の溢れ

北杜市 水上 英子 七〇歳

日の暮るる轍に匂ふ春の泥

北杜市 水上 英子 七〇歳

【評】

「山梨県シルバ―俳句大会」の選をはじめてさせていただきました。応募資格は六十歳以上ですが、最高齢は一〇二歳、平均年齢は八十一歳とお聞きしました。龍太先生は「俳句は若いうちには定かな年齢を、老いては克明な年齢をその作品に刻むことだろうと思う」と俳句鑑賞読本の中で言及し、「その折、その齢でなければ言い止めることのできない、かげがえのない〈時〉を定めた作品というものもある」と仰っています。まさに一期一会。今、この時を大事にして俳句のある暮らしが楽しいと思えるよう私も研鑽していきたいと思っています。

○(特選句)

○一句目 囀りながら空高く舞い上がる雲雀の生息を「ひたすら」と表現し、なお目つ「親し」と春の空の優しさを讃えています。長閑な春の田園風景の中に命のきらめきが感じられる秀逸な作品と思います。

○二句目 冬という季節は寒牡丹を鮮明にしますが、その美しく透きとおる花びらにかけがえのない作品のゆらぎと言いつつ、あんなに哀しみを感ずいたのです。「黎明」の漢語的表現が作品を引き締めています。

○三句目 黒松は深い亀甲状の幹と硬く長い葉が特徴。別名「雄松」といわれます。「赤松の幹の百年」でも句は成り立つように見えますが、百年の重量感はやはり「黒松」でしょう。「日脚伸ぶ」が絶妙。

○四句目 都会でこんなことをしていたら泥棒と間違えられるかもしれません。声をかけてもいないので裏へ廻つてみたのだけれど、なーんだ留守かと。ぽかぽかの小春日和。返り花は何だか母のよう。

○五句目 花を見るより先に飛び込んでくるのがその匂い。どこからともなく漂ってくる芳香に思わずきよるきよると。「振り返り」の措辞に情景が鮮やかに印象づけられ、深秋の想いを深くします。

■佳作■

トラクター動きだしたり村の春

北杜市 内藤とし子 七〇歳

老鷲に目覚めて開けし窓に富士

富士吉田市 田辺和代 八〇歳

冬麗の道真っ直ぐに大菩薩

甲州市 田口友正 九〇歳

紙風船子等待つ村へ薬売り

甲斐市 佐野彌生 八二歳

大富士の森林限界虫集く

富士吉田市 舟久保安子 六九歳

春の湖水を豊かに逆さ富士

富士吉田市 三浦恒子 九〇歳

しきりなる落花の中にバスを待つ

富士吉田市 宮下節子 七八歳

平穏の願ひを筆に初硯

都留市 渡辺君代 七七歳

第九聴きさつぱりとして年送る

上野原市 岡部テル子 九四歳

ぐんぐんとジェット雲引く小春の日

甲斐市 小澤史子 八四歳

書き初めや心さわやか墨のいろ

富士河口湖町 渡邊たき子 八五歳

氷壁の陰影深き今朝の富士

富士吉田市 渡辺久美子 七三歳

万緑を映す水面に魚の影

上野原市 河野政恵 八一歳

淑気満つ赤き帽子の七福神

北杜市 仲沢やよる 八三歳

夕映えや案山子の肩に赤とんぼ

市川三郷町 笠井文次 七二歳

命ある限り反戦春浅し

韮崎市 山村満代 八九歳

子麓師の一句の景や松手入

北杜市 松林新一 九一歳

どの顔も笑顔で囲むどんどの火

甲府市 坂本春明 七四歳

湯豆腐や踊り崩るる花かつお

都留市 大澤茂子 七七歳

山麓や風のかたちに野火走る

甲府市 小菅光子 八四歳

野焼あり土手に張り付く村の衆

北杜市 鈴木いつ子 七三歳

剪定の葡萄の樹液染みる土

南アルプス市 小松重和 八四歳

本山へ向ふ山道実南天

山梨市 二宮庸一 八四歳

春光や天窓のある絵画展

北杜市 小泉 優子 七一歳

実直な主の如し吊し柿

大月市 山口 美佐子 六四歳

蠟梅の咲き盛りたる寺の門

笛吹市 渡邊 眞由美 七〇歳

露天湯に卒寿語らふ姫辛夷

市川三郷町 小林 一江 九二歳

精検の済みたる午後の小春かな

都留市 渡辺 孝行 八二歳

晴れ渡る広瀬直人忌桃の花

北杜市 金子 至 七八歳

枯芝や風の中なる遺跡群

北杜市 仲沢 和子 八一歳

耕して土の命を呼び起す

都留市 高部 志づの 八八歳

霾や同胞命果てし地ぞ

笛吹市 佐野 正司 八九歳

籤引の一新新酒まず祖父に

富士吉田市 渡辺 悠美子 七九歳

病む母の腕細きや蝉しぐれ

斐崎市 横森 洋子 七二歳

あぢさいのがくあぢさいの毬の数

富士川町 赤池 静江 九一歳

落穂拾ひ手許に日暮れ来ていたる

甲斐市 中込 儀一 八五歳

人去りしベンチふわりと春の風

甲府市 上田 美弥子 八八歳

夏蝶や早瀬落ちあふ渦の上

富士川町 有泉 よ志枝 八三歳

甲高き工事場の音寒に入る

山梨市 齊藤 宜雄 九四歳

マスクして今朝の寒さを隠しけり

甲斐市 青柳 俊子 九三歳

鍬の柄の父の手艶や秋たかし

北杜市 松林 新一 九一歳

梅の花地蔵の前を通りけり

上野原市 長田 重子 八〇歳

春雪を踏み締め妻の墓目指す

北杜市 細川 富士夫 八四歳

読初は久女の句集喜寿の卓

都留市 田中 三千子 七六歳

本降りとなりたる雪の峠越ゆ

富士吉田市 鈴木 文代 六八歳